

千葉県八千代市

白筋遺跡 b 地点発掘調査報告書

2008



八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市村上に所在する、白筋遺跡b地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、八千代市教育委員会が実施した。
3. 調査遺跡の所在地、期間、調査原因等は、下記のとおりである。

遺跡名 白筋遺跡 b地点
所在地 八千代市村上字殿内1587-3 外
確認調査
調査期間 2007（平成19）年6月29日～2007（平成19）年7月10日
調査面積 466㎡/3686.44㎡
調査原因 立体駐車場建設
本調査
查期間 2007（平成19）年7月20日～2007（平成19）年8月13日
調査面積 806㎡
調査原因 立体駐車場建設
4. 整理作業及び報告書作成作業は、2007年9月1日～2008年2月29日までの期間行った。
5. 本書の編集・執筆は、1章及び2章1節を宮澤久史が、2章2節、3章1節2節を伊藤弘一が、3章2節の一部を高屋麻里子が行った。野外調査及び室内作業での写真撮影は主に高屋麻里子が行った。
6. 出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。
7. 本書、図2に使用した地形図は、八千代市発行の2,500分の1八千代都市計画基本図（平成13年修正）No19、20を使用した。
8. 本書、図3に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1地形図「佐倉」を基に作成した。
9. 各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。

竪穴住居跡・掘立柱建物跡…1/60 溝・遺構…1/100 土坑…1/20
縄文土器…1/3 土師器・須恵器・土製品・石製品…1/3 土師器甕…1/4
10. 本書に使用したスクリーントーン表示は以下のとおりである。

焼土  粘土 
11. 発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては、関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同、敬称略）

千葉県教育委員会 八千代市立郷土博物館 村田一男 中野修秀 須藤智夫 内田武志

目 次

序 文

凡 例

目 次

挿図目次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と歴史的環境	2
第4節 調査の概要	6
第2章 調査された遺構と遺物	11
第1節 縄文時代	11
第2節 奈良・平安時代	13
第3章 成果と課題	25
第1節 縄文時代	25
第2節 奈良・平安時代	25

図 版

挿 図 目 次

第1図 白筋遺跡周辺地形図（1）	2
第2図 白筋遺跡周辺地形図（2）	3
第3図 白筋遺跡周辺地形図及び周辺遺跡分布図	5
第4図 遺構配置図	7
第5図 002P	11
第6図 遺構外出土遺物	12
第7図 002D（1）	14
第8図 002D（2）	15
第9図 001H	16
第10図 002H	17
第11図 001I	18
第12図 002I	19
第13図 001M	21
第14図 004P～014P	23
第15図 白筋遺跡各地点調査範囲	24
第16図 白筋遺跡周辺遺跡遺構配置図	26
第17図 周辺遺跡にみられる規格的な配置の掘立柱建物遺構と柱間寸法	28

第1章 序 説

第1節 調査にいたる経緯

平成18年9月、八千代市村上字殿内1587-3外の土地について、株式会社ジョイフルカンパニー代表取締役社長本田昌也氏（以下、「事業者」という）から立体駐車場建設工事に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。照会地は市遺跡No.208白筋遺跡の緑地地区であり、過去の隣接地及び周辺部での調査の成果から、本照会地においても遺構が検出される可能性を考慮し、市教委は、事業者に対して、照会地に対して試掘調査実施し、その結果で回答するとの指導を行った。試掘調査は、平成19年6月に行い、奈良・平安時代の竪穴住居1軒を検出した。この結果を受け、市教委は、照会地3,686.44㎡に対して全域「遺跡有り」の回答を行い、建設にあたっては、発掘調査が必要となる旨を伝えた。その後、市教委と関係諸機関の間で発掘調査実施の為の協議が進められ、平成19年6月に文化財保護法（以下、「法」と略）93条による土木工事の届出が事業者から届出され、市教委から法99条による発掘調査の通知が提出され、準備の整った平成19年6月29日から遺跡の範囲や性格を把握するための確認調査が開始された。

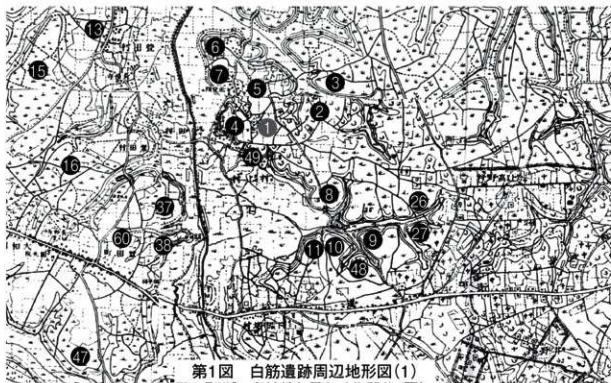
確認調査は、市教委が、八千代市の平成19年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて平成19年6月29日から平成19年7月10日の間、実施した。試掘時の所見から遺物包含層は検出されないと判断されたため、調査は遺構検出作業が中心となった。結果、試掘時に検出された竪穴住居跡1軒のほかには奈良・平安時代の溝1条、土坑数基を検出した。この結果を踏まえ、市教委は開発区域内の806㎡については引き続き協議が必要であると判断し、その旨を伝えた。

確認調査の結果を受け、市教委と事業者及び関係各機関との間で再び協議が進められ、協議範囲806㎡について、埋蔵文化財の現状保存は困難との判断に至り、記録保存の措置として、発掘調査を実施することとなった。平成19年7月13日事業者から八千代市長あて発掘調査依頼が提出され、7月18日、発掘調査を受託決定し、市教委は、平成19年度の民間開発事業の直営調査として平成19年7月20日から本調査を実施することになった。

第2節 調査の方法と経過

調査の方法としては、調査区域を重機で表土除去作業を行った。表土除去後、ソフトローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については、土層観察用のベルトを適宜設定し覆土除去を行った。調査の進捗にあわせ、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。写真撮影には、プローニー判のモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを中心に使用し、補助的に35mmモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては、公共座標に合わせグリッドを設定した。設定にあたっては、5m単位で設定し、各グリッド杭を基準としながら、光波測距儀による測定と従来の遺り方実測を適宜併用して行った。8月5日に調査区の部分的な引渡しを行い、8月10日に完掘全景写真を撮影し、8月13日機材の撤収を行い、全工程を終了した。

第3節 遺跡の位置と歴史的環境

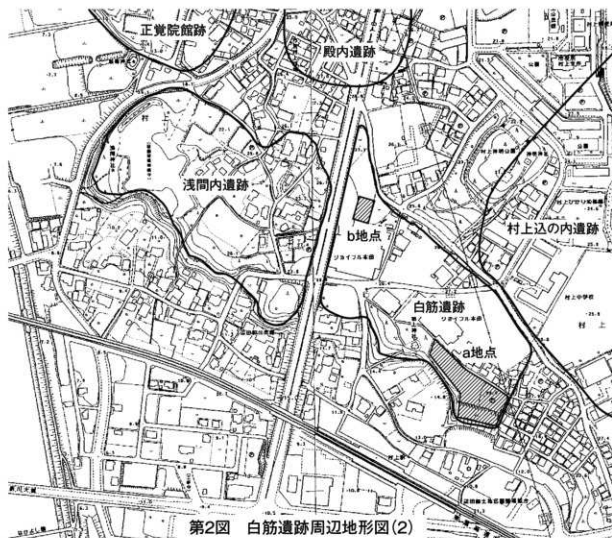


白筋遺跡(1)の所在する八千代市は、千葉県北西部に位置する。八千代市の地形は、市域中央を流れ、印旛沼に西から注ぎ込む新川とその支流の神崎川・桑納川・高津川等の河川により、複雑な樹枝状の谷津が発達する台地により形成される。市域の台地の一般的傾向として、南側は急傾斜で、北側は段丘状の地形を形成している。台地の標高は、14~30mで、東京湾と印旛沼との分水界を起点として南西部で高く、北から東にかけて徐々に低くなる。

白筋遺跡は、市域中央の新川東岸の村上地区に位置し、現在、東葉高速鉄道村上駅から徒歩5分ほどの台地上に位置している。本遺跡が所在する台地は、新川を西に望み、南側は新川から入り江状に入り込む辺田前・沖塚前低地と仮称される低地によって区切られ、同様に北側も新川から入り込む谷津によって区切られている舌状台地である。白筋遺跡は、その舌状台地のくびれ部に位置している。標高は約26~27mで、新川の低地からの比高差は約10~11mである。台地南端には根上神社が鎮座し、境内は、全長約50mの前方後円墳である根上神社古墳(49)が所在し、八千代市の指定文化財となっている。

白筋遺跡の周囲は、学史的にも著名な村上込ノ内遺跡をはじめとする村上遺跡群が展開し、遺跡が濃密に展開する地区となっている。本遺跡の北方には村上込ノ内遺跡(2)、村上名主山遺跡(3)が、西方には浅間内遺跡(4)、殿内遺跡(5)、古墳時代後期の集落跡である持田遺跡(6)更には戦国期の正覚院館跡(7)、が展開し、南方には辺田前・沖塚前低地を取り囲むように黒沢台遺跡(8)、黒沢池上遺跡(9)が連なり、白筋遺跡に対して、辺田前・沖塚前低地の南側対岸の台地には沖塚遺跡(10)及び沖塚古墳(11)が所在する。また、新川を越えた新川西側地区には、権現後遺跡をはじめとする萱田遺跡群が展開している。

白筋遺跡周辺は、八千代市辺田前上地区画整理事業に関連して平成6年~16年に、市教委及び八千代市遺跡調査会による調査が行われた。浅間内遺跡、沖塚遺跡、白筋遺跡の調査が行われ、今回、調査を行ったb地点は、調査会によって調査された浅間内遺跡から国道16号を隔てた東側隣接地に位置する。



次に周辺の遺跡及び白筋遺跡について、八千代市を中心に簡単にまとめてみたい。

旧石器時代 白筋遺跡を含む村上遺跡群では村上込ノ内遺跡、沖塚遺跡、浅間内遺跡で多くの石器群が調査されている。村上込ノ内遺跡では、Ⅲ層で礫群が調査されている。沖塚遺跡では、千葉県文化財センターによる調査で17ヶ所、八千代市の調査で2ヶ所の石器集中地点を検出し、浅間内遺跡では5箇所の石器集中地点を検出している。新川を越えた萱田遺跡群においては、権現後遺跡(12)、北海道遺跡(13)、ヲサル山遺跡(14)、坊山遺跡(15)、白幡前遺跡(16)で多くの石器群が調査されている。中でも権現後遺跡においては、6枚の文化層と24ヶ所の石器集中地点を検出し、最下層から出土した局部磨製石斧は市内でも最古級の石器となる。萱田遺跡群から距離を隔てるが、向山遺跡(17)でも遺物集中地点を確認している。高津川流域においては、一本松前遺跡(18)、高津新山遺跡(19)で遺物集中地点が検出されている。

縄文時代 早期の遺跡としては、多数の撚糸文期の土器を出土した上谷遺跡(20)、向境遺跡(21)、境堀遺跡(22)などがあり、上谷遺跡では多数の条痕文期の炉穴も検出している。同様に条痕文期の炉穴を多数検出した遺跡に間見穴遺跡(23)などがある。白筋遺跡に対して新川の対岸にあたる萱田遺跡群においてもヲサル山遺跡などで炉穴が調査され、また、早期の遺物が多数出土している。八千代市の早期遺跡の特徴として撚糸文期と条痕文期にピークがあり、その間の沈線文期にやや空白期があることが挙げられる。隣接する浅間内遺跡では、撚糸文期期の遺物が少量出土している。

前期の遺跡としては、黒沢期の遺構を中心としたライノ作遺跡(24)、ライノ作南遺跡(25)、仲ノ台遺跡(61)、芝山遺跡(62)、内野南遺跡(63)等があり、西八千代遺跡群と仮称されている。芝山遺跡、ライノ作南遺跡等からは、縄文時代の陥穴も多数検出されている。上高野地区では、浮島期の遺跡として二重堀遺跡(26)黒沢池上遺跡、新林遺跡(27)等がある。西八千代地区、上高野地区いづれも、前期の遺跡群が谷津の奥部に展開していることが示唆に富む。

中期初頭五領ヶ台期の遺跡としては前述の上谷遺跡があり、五領ヶ台式土器とともに土坑多数を検出している。中期前半の阿玉台式期になると八千代市内で縄文時代の遺跡が充実してくる。白筋遺跡に隣接する浅間内遺跡で2軒の阿玉台式期の竪穴住居跡とともにIa・Ib期の阿玉台式土器が比較的まとまって出土している。その他に阿玉台式期の住居跡としての萱田地区ではヲサル山遺跡で1軒、ヲサル山南遺跡(28)で8軒検出している。さらに川崎山遺跡m地点(註1)で5軒の竪穴住居跡が調査されている。向境遺跡・境堀遺跡においても比較的多量の阿玉台式土器が出土している。八千代市における阿玉台式期の様相としてはIa・Ib期にピークがあり、Ⅱ式期までに集中するようだ。中期後半の加曾利E式期では、坊山遺跡で1軒、新林遺跡で2軒、長兵衛野南遺跡(29)で2軒、栗谷遺跡(30)で3軒がある。また、中期から後期に中心をおく貝塚として、佐山貝塚(31)、神野貝塚(32)がある。いずれもヤマトシジミを中心とする汽水性の貝塚とされている。

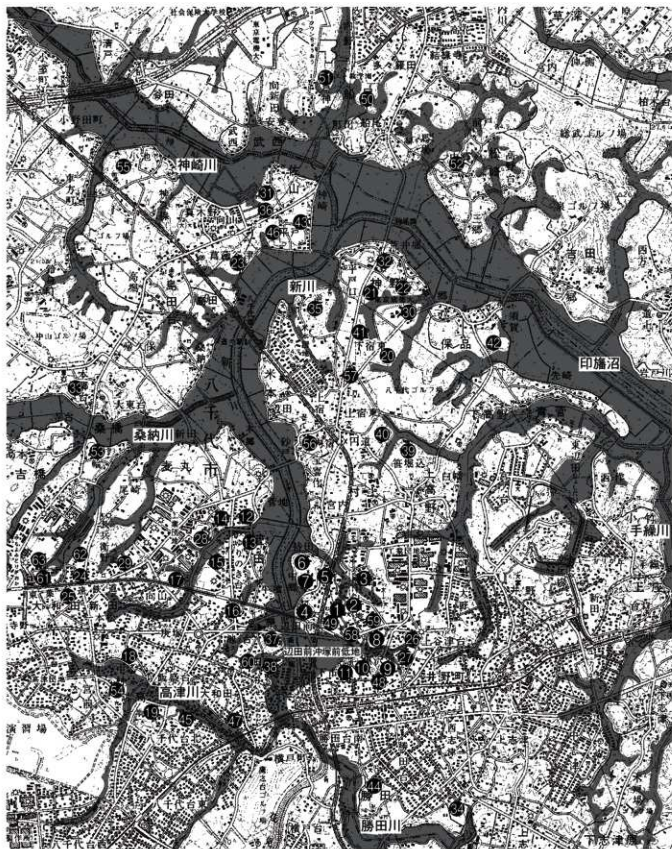
後期掘之内式期の遺物を出土する遺跡に本郷台遺跡(33)、加曾利B式期の遺跡として新東原遺跡(33)がある。また、近年、船橋市との市境を流れる桑納川から後晩期の土器が大量に採集されたことが注目されている。

弥生時代 今回の調査地点で、弥生時代の遺構の検出はされなかったが、周辺遺跡を含め、弥生時代～古墳前期の遺跡が八千代市内では大きく展開する。中期後半の宮ノ台式期にあっては、前述の栗谷遺跡、米本地区の逆水遺跡(35)、佐山地区の田原窪遺跡(36)等が展開する。本遺跡が所在する村上地区では、沖塚遺跡において中期前半期の土器が出土しており、市内では最古の弥生土器となっている。

後期に至ると本遺跡が所在する村上遺跡群の中では、村上込ノ内遺跡で14軒、浅間内遺跡で19軒の竪穴住居が調査されている。新川の対岸にあたる萱田遺跡群ではヲサル山遺跡、白幡前遺跡、井戸向遺跡、北海道遺跡、権現後遺跡から合計、172軒の後期～古墳前期の住居跡が報告されている。さらに萱田遺跡群の南側の小支谷を隔て、川崎山遺跡(37)で26軒、上ノ山遺跡(38)で弥生時代後期5軒の住居が調査されている。また、上高野地区には後期の住居跡10軒をした平沢遺跡(39)、阿蘇地区には阿蘇中学校東側遺跡(40)、保品・神野地区には1遺跡で92軒を検出した栗谷遺跡、その周辺遺跡として役山東遺跡(41)、境堀遺跡、上谷遺跡、おおびた遺跡(42)が所在し、佐山地区に道地遺跡(43)等がある。

古墳時代 前期の集落では、栗谷遺跡で23軒、間見穴遺跡で17軒の竪穴住居跡を検出している。また、市城南部の勝田地区の勝田大作遺跡(44)で6軒の住居跡が調査されている。古墳時代中期以降、遺構の検出数がやや低調になる。まとまった軒数が検出されている集落遺跡をみてみると、中期では、北海道遺跡で22軒、後期では、内込遺跡(46)で20軒の竪穴住居跡が調査されている。また、中期～後期の遺跡として向境遺跡では、調査された住居跡が5軒であるが、カマド出現前後の状況を知る上で良好な資料を提供している。さらに権現後遺跡、川崎山遺跡h地点などが中期～後期の遺跡として挙げることができ、川崎山遺跡h地点では石製模造品工房跡が検出されている。

周辺の古墳として、間見穴遺跡で前期と後期の古墳が計9基調査されている。また、6～7世紀の古墳として平戸台2号墳(46)、大和田地区に箱式石棺のみの調査の塚場台古墳(47)、白筋遺跡が所在する村上地区には、方墳として黒沢台古墳(48)、円墳で貝化石の主体部を検出した沖塚古墳がある。



- | | | | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|-------------|------------|-----------|---------------|
| 1. 白筋遺跡 | 2. 村上辺の内遺跡 | 3. 村上名主山遺跡 | 4. 清間内遺跡 | 5. 殿内遺跡 | 6. 持田遺跡 | 7. 正覚院館跡 | 8. 黒沢台遺跡 |
| 9. 黒沢池上遺跡 | 10. 沖塚遺跡 | 11. 沖塚古墳 | 12. 権現後遺跡 | 13. 北海道遺跡 | 14. ヲサル山遺跡 | 15. 坊山遺跡 | 16. 白幡前遺跡 |
| 17. 向山遺跡 | 18. 一本松遺跡 | 19. 高津新山遺跡 | 20. 上谷遺跡 | 21. 向塚遺跡 | 22. 地蔵遺跡 | 23. 関見穴遺跡 | 24. タイノ作遺跡 |
| 25. タイノ作南遺跡 | 26. 二重堀遺跡 | 27. 新林遺跡 | 28. ヲサル山南遺跡 | 29. 長兵衛野南遺跡 | 30. 栗谷遺跡 | 31. 佐山貝塚 | 32. 神野貝塚 |
| 33. 本郷台遺跡 | 34. 新東原遺跡 | 35. 逆水遺跡 | 36. 田原宮遺跡 | 37. 川崎山遺跡 | 38. 上ノ山遺跡 | 39. 平沢遺跡 | 40. 阿蘇中学校東側遺跡 |
| 41. 夜山東遺跡 | 42. おおびた遺跡 | 43. 道地遺跡 | 44. 勝田大作遺跡 | 45. 内込遺跡 | 46. 平戸台2号墳 | 47. 臺場台古墳 | 48. 黒沢台古墳 |
| 49. 横上神社古墳 | 50. 船場白幡遺跡 | 51. 烏神山遺跡 | 52. 前戸遺跡 | 53. 吉橋城跡 | 54. 高津館跡 | 55. 作山遺跡 | 56. 米本城跡 |
| 57. 下宿東遺跡 | 58. 村上第1塚群 | 59. 村上第2塚群 | 60. 北裏畑遺跡 | 61. 件ノ合遺跡 | 62. 芝山遺跡 | 63. 内野南遺跡 | |

第3図 白筋遺跡周辺地形図及び周辺遺跡分布図

S=1/50,000

奈良・平安時代 八千代市では、8世紀後半から9世紀にかけて再び集落が大規模に形成されるようになる。白筋遺跡を含む新川中流域には萱田遺跡群・村上遺跡群が展開し、新川を下り、印旛沼西部南岸には、上谷遺跡、栗谷遺跡をはじめとする保品・神野遺跡群が展開する。これらの遺跡群は「和名類聚抄」にある「下総國印波郡村神郷」に比定されている。多量の文字資料、仏教的遺物、生産・生活・儀礼などに関わる鉄器が出土し、竪穴住居跡以外に掘立柱建物跡・手工業生産を行った遺構が調査されている。また、印旛沼西部北岸には船徳白幡遺跡(50)、鳴神山遺跡(51)が所在し、小規模な調査ながら瓦塔を出土した前戸遺跡(52)があり、各遺跡の分析から大規模な地域の開発の様相がうかがえる。隣接する浅間内遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居跡54軒、掘立柱建物跡10棟などを検出し、同様に村上込ノ内遺跡では164軒の竪穴住居跡と24棟の掘立柱建物跡を検出している。萱田遺跡群では権現後遺跡で竪穴住居跡69軒、掘立柱建物跡21棟、北海道遺跡で竪穴住居跡116軒、掘立柱建物跡10棟、井戸向遺跡で竪穴住居跡102軒、掘立柱建物跡48棟、白幡前遺跡で竪穴住居跡279軒、掘立柱建物跡150棟をそれぞれ検出している。中でも白幡前遺跡では四面庇の掘立柱建物跡や、瓦塔を出土していることから、村落内宗教施設が存在等も指摘されている。保品・神野遺跡群においては栗谷遺跡で55軒の竪穴住居跡、13棟の掘立柱建物跡が調査され、上谷遺跡では竪穴住居跡203軒、掘立柱建物跡194棟、向境・境堀遺跡では竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡13棟、が調査されている。これらの遺跡はいずれも多量の墨書土器を出土し特に白幡前遺跡や上谷遺跡では長文の墨書土器が出土していることで注目されている。

中世・近世 中世では、館跡として土塁・堀の遺構が検出され、康応2(1390)年銘の武藏型板碑、北宋銭、陶磁器片等が出土した正覚院館跡や高津館跡(54)、中世の土坑墓群が調査された作山遺跡(55)がある。戦国期には、白筋遺跡の北方2.2キロに米本城跡(56)があり、米本城に関連する遺跡として下宿東遺跡(57)がある。同様の戦国期の城跡として吉橋城跡(53)がある。

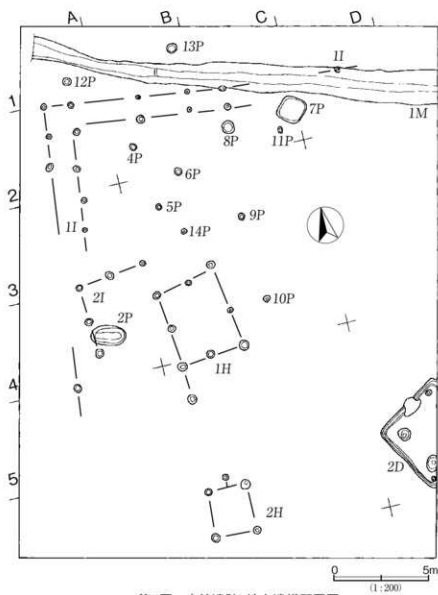
近世では、近世に構築されたと考えられる村上第1塚群(58)村上第2塚群(59)がある。両塚群は、塚の形態・規模・盛土等に共通点はみられず、古銭・小皿・殊子玉などが出土している。遺構の性格については不明とされているが、村ないしは部落全体の共通目的下にあった民間信仰に関連する所産ではないかと推察している。その他の近世遺跡として、萱田町に所在する北裏畑遺跡(60)がある。また、千葉市との市境である八千代台南地区には高津新田野堀遺跡(61)があり、近世下総小金牧の一つである下野牧の一部となる野馬土手の一部と堀が調査されている。近年報告書が刊行された権現後遺跡では19世紀の溝とその時期の陶磁器類が八千代市としてはまとまった資料として出土している。

第4節 調査の概要

本節では、白筋遺跡の過去の調査履歴に触れながら、今回検出された遺構・遺物が白筋遺跡全体の中でどのように位置付けられるのか時代ごとに概観してみる。まず、今回の白筋遺跡b地点で検出された遺構は、縄文時代の陥穴1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、溝1条、棚列2条、土坑11基である。また、基本的な層序は、I層表土、II層ソフトロームであったため、遺物包含層は検出されなかった。

白筋遺跡の過去の調査事例として今回のb地点の南方約250mにa地点の調査がある。a地点の調査では、根ノ上神社古墳の周溝と思われる溝1条、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、中近世の溝2条を検出している。また、今回のb地点は、浅間内遺跡1次本調査地区にも近接しており、浅間内遺跡1次本調査地区との関連の方が強いと考えられる。浅間内遺跡1次本調査においては、奈良・平安時代の竪穴住居跡11軒、同、掘立柱建物跡1棟、中近世の溝7条が検出されている。

(註1) 現在整理中。



第4図 白筋遺跡b地点遺構配置図

〔白筋遺跡周辺遺跡引用文献〕

- (1) 中野修秀他2007「千葉県八千代市 浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡」八千代市遺跡調査会
- (2) 天野努 他1974「八千代市村上遺跡群」(財)千葉県都市公社
- (3) 平野元三郎1972「名主山遺跡」名主山遺跡発掘調査団
- (4) 浅間内遺跡関連文献
常松成人他2000「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度」
八千代市教育委員会
常松成人他2002「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度」
八千代市教育委員会
常松成人 2003「千葉県八千代市 浅間内遺跡発掘調査報告書」八千代市教育委員会
常松成人 2007「千葉県八千代市 浅間内遺跡発掘調査報告書 平成18年度」
八千代市教育委員会
中野修秀他2007「千葉県八千代市 浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡」八千代市遺跡調査会
- (5) 現在整理中
- (6) 八千代市教育委員会1996「八千代市埋蔵文化財調査年報－平成7年度－」
- (7) (6)に同じ。
- (8) 大鷹依子他1994「八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡 他」(財)千葉県文化財センター
- (9) 森竜哉 他2003「千葉県八千代市 黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会
- (10) (1)に同じ。
- (11) 八千代市史編さん委員会1991「八千代市の歴史 原始・古代・中世」
- (12) 権現後遺跡関連文献
加藤修司他1984「八千代市権現後遺跡」(財)千葉県文化財センター
大野康男 1994「八千代市権現後・北海道・井戸向遺跡」(財)千葉県文化財センター
伊藤弘一・宮澤久史2007「千葉県八千代市 権現後遺跡—公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ—」
八千代市教育委員会
- (13) 阪田正一他1985「八千代市北海道遺跡」(財)千葉県文化財センター
- (14) 藤岡孝司他1986「八千代市ラサル山遺跡」(財)千葉県文化財センター
- (15) 大野康男 1993「八千代市坊山遺跡」(財)千葉県文化財センター
- (16) 大野康男他1991「八千代市白幡前遺跡」(財)千葉県文化財センター
- (17) (8)に同じ。
- (18) 八千代市教育委員会2005「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」
- (19) 朝比奈竹男他1982「千葉県八千代市 高津新山遺跡」八千代市教育委員会
- (20) 朝比奈竹男他2005「千葉県八千代市 上谷遺跡」八千代市遺跡調査会
- (21) 宮澤久史 2004「千葉県八千代市 向境遺跡」八千代市遺跡調査会
加藤修司 1998「八千代市向境遺跡」(財)千葉県文化財センター
- (22) 宮澤久史 2005「千葉県八千代市 境堀遺跡」八千代市遺跡調査会
- (23) 田中裕 他2004「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3－八千代市問見穴遺跡－」
(財)千葉県文化財センター
- (24) 森竜哉 1996「仲ノ台遺跡・ライノ作南遺跡他発掘調査報告書」
八千代市西八千代遺跡群調査会

- (25) 森竜哉 2000『ツイノ作南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (26) 小川和博他2007『二重堀遺跡・新林遺跡』
八千代市二重堀遺跡調査会・八千代市新林遺跡調査会
- (27) (9) に同じ。
- (28) (11) に同じ。
伊藤弘一・宮澤久史2008『千葉県八千代市 不特定遺跡発掘調査報告書V』八千代市教育委員会
- (29) 森竜哉 2000『長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (30) 宮澤久史他2004『千葉県八千代市 栗谷遺跡』八千代市遺跡調査会
- (31) (11) に同じ。
- (32) (11) に同じ。
- (33) 伊藤弘一・森竜哉2004『高津館跡b地点・本郷台遺跡』八千代市教育委員会
- (34) 常松成人 2004『新東原遺跡a地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
- (35) 逆水遺跡関連文献
八千代市教育委員会1996『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』
八千代市教育委員会2003『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』
八千代市教育委員会2004『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』
八千代市教育委員会2007『千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』
伊藤弘一・宮澤久史2008『千葉県八千代市 不特定遺跡発掘調査報告書V』八千代市教育委員会
- (36) 八千代市教育委員会1995『平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報』
- (37) 川崎山遺跡関連文献
a 地点 平岡和夫他 1979『萱田町川崎山遺跡』八千代市遺跡調査会
b 地点 八千代市教育委員会2002『千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告書1』
c 地点 小川和博他 1999『千葉県八千代市川崎山遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』
八千代市川崎山遺跡調査会
d 地点 常松成人・川口貴明2003『千葉県八千代市川崎山遺跡d地点』八千代市遺跡調査会
e 地点 八千代市教育委員会1998『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度』
f 地点 八千代市教育委員会1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度』
g 地点 八千代市教育委員会1999『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度』
h 地点 森竜哉 2004『千葉県八千代市川崎山遺跡h地点』八千代市遺跡調査会
i 地点 八千代市教育委員会2000『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度』
j 地点 八千代市教育委員会2003『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』
k 地点 伊藤弘一・宮澤久史2006『千葉県八千代市川崎山遺跡k地点』八千代市遺跡調査会
- (38) 武藤健一・深谷昇2000『千葉県八千代市上ノ山遺跡b・c地点発掘調査報告書』
上ノ山遺跡調査会 八千代市遺跡調査会
- (39) 八千代市教育委員会1997『八千代市埋蔵文化財調査年報-平成7年度版-』
- (40) 佐藤克己他1980『阿蘇中学校東側遺跡』八千代市遺跡調査会
藤原均 他1984『阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』八千代市遺跡調査会
- (41) (30) に同じ。
- (42) 増田誠蔵他1975『おおびた遺跡』おおびた遺跡調査団・八千代市教育委員会
- (43) 林勝則 1986『平戸地遺跡』八千代市教育委員会

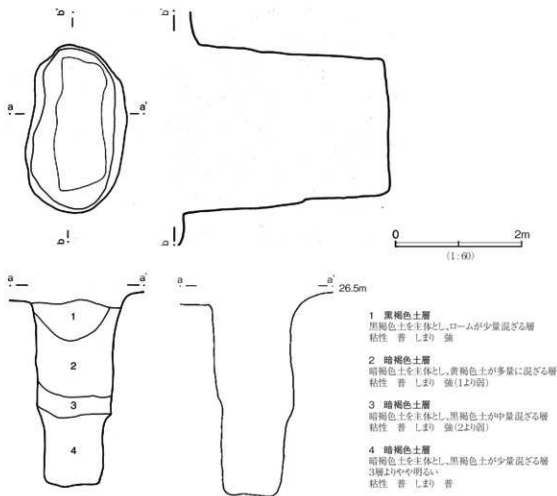
- 田中裕 他2004「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2-八千代市道地遺跡-」
 (助)千葉県文化財センター
- (44) 秋山利光 2007「千葉県八千代市 勝田大作遺跡」八千代市遺跡調査会
- (45) 森竜哉 他2001「千葉県八千代市 内込遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会
 森竜哉 他2003「千葉県八千代市 内込遺跡b地点発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会
- (46) 常松成人 2001「千葉県八千代市 平戸台2号墳」八千代市教育委員会
- (47) 秋山利光他2002「千葉県八千代市 市内出土人骨分析委託報告書 堰場台古墳 真木野古墳」
 八千代市教育委員会
- (48) (11) に同じ。
- (49) (11) に同じ。
- (50) 糸川道行 2004「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XVI-印西市船尾白幡遺跡-」
 (助)千葉県文化財センター
- (51) 田形孝一他1999「千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書-印西市鳴神山
 遺跡・白井谷奥遺跡-」(助)千葉県文化財センター
- (52) 伊藤弘一 2005「前戸遺跡」(助)印旛郡市文化財センター
- (53) (11) に同じ。
- (54) 伊藤弘一・森竜哉2004「高津館跡b地点・本郷台遺跡」八千代市教育委員会
- (55) 森竜哉 2003「作山遺跡発掘調査報告書」八千代市教育委員会
- (56) (11) に同じ。
- (57) 八千代市教育委員会2005「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」
- (58) (2) に同じ。
- (59) (2) に同じ。
- (60) 八千代市教育委員会2002「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度」
 伊藤弘一・宮澤久史2008「千葉県八千代市 不特定遺跡発掘調査報告書V」八千代市教育委員会
- (61) (24) に同じ。
- (62) 落合章夫他1999「八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡」(助)千葉県文化財センター
- (63) 内野南遺跡関連文献
 a 地点 常松成人 2000「内野南遺跡」八千代市遺跡調査会
 b 地点 八千代市教育委員会1999「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度」
 c 地点 八千代市教育委員会2003「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度」

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

今回の調査で検出された遺構・遺物は、陥し穴1基と表面採集で得られた縄文土器片1点であった。

1. 002P (第5図)



第5図 002P

検出地区 A-4 Gに位置し、調査区西側に所在する。002I、001Iと接近している。

遺構 長軸1.80m×短軸1.00mの楕円の陥穴で、深さは2.10mである。坑底は長軸0.70m×短軸0.25mの楕円であった。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ急傾斜で立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆土 基本は4層に分層される。2、3、4層は人為的な埋め戻しと考えられ、1層は自然堆積と考えられる。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺構の形状、規模、覆土の観察から縄文時代の陥し穴と判断した。

遺構外出土遺物（第6図）



第6図 遺構外出土遺物

表面採集（廃土中）から出土。後期彌之内I式の精製土器。両耳壺あるいは注口付き土器の口縁付近と考えられる。刻みの入った隆帯下にRL縄文施文。把手に盲孔とC字状の意匠を施している。南東北、綱取系の土器の影響を受けたものと考えられる。色調は暗褐色～黒褐色。胎土は緻密で、焼成は良好である。

第2節 奈良・平安時代

今回の調査で検出された遺構・遺物は、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、欄列（垣根）2条、溝1条、土坑11基であった。単独で調査された土坑の内、数基は、掘立柱建物跡その他の遺構などと組み合わせる可能性もある。

1. 002D（第7図、8図）

検出地区 D-6Gに位置し、調査区東側に所在し、調査区外にも広がっている。

遺 構 長軸（東西）4.20m×短軸（南北）4.20m。深さ0.40mの方形の竪穴住居跡である。床はソフトロームをよく踏み固めた床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がり、場所によっては、オーバーハンクぎみに立ち上がる箇所も見受けられた。

付属施設 小穴は4基検出した、柱穴はP1～P2で、遺構が調査区外にも広がっているため、本来4本柱の住居跡と考えられる。出入り口施設は検出されなかった。P3、4は補助的な柱穴と考えられる。

周溝は、幅0.20m、深さ約0.10mのしっかりとした溝で、カマド袖部分で止まっていた。本来的にはカマド部分以外は全周していたと考えられる。

カマド 住居跡北壁ほぼ中央に位置し、両袖とも残り、遺存状況は良好である。火床部から煙道部まで0.80m、袖部内側は0.80mである。火床部から燃焼部は、平坦な面を作るが、煙道部は30度の角度をもって立ち上がる。火床は若干掘りくぼめる程度である。砂質粘土で構成されている。4層は天井部が崩落した層である。

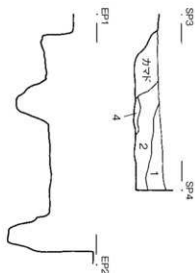
覆 土 基本3層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 住居全体の覆土上層から下層にかけて、少破片を中心に少量出土した。1は、土師器、武藏型の甕で、カマド脇、住居跡北隅付近で正位で立った状態で出土。2は、土師器の坏で、丸底で体部をヘラ削り調整を施している。3は、土師器で口縁をつまみあげた常総型の甕の口縁である。

所 見 出土遺物から奈良時代（8世紀第2四半期）の竪穴住居跡と判断した。

遺物観察表

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	色調	胎土	産地	文様・調整等の特徴	備考
1	土師器 甕 (武藏型)	口径 — 器高 — 底径 —	4/5	外面 橙褐色～暗褐色		貞	口縁部外反 胴部はくの字状に屈曲 胴部上半に最大径をもち、肩部を作る 外面 口縁部内側のナデ 胴部上半微収のナズリ 胴部中央～下半微収～胴底のナズリ 底部ナズリ	
2	土師器 坏	口径 142 器高 — 底径 —	体部～底部片	橙褐色		昔	外面 口縁部方向のナデ 胴部下半～下半微収方向のヘラナズリ 底部ヘラナズリ	
3	土師器 甕 (常総型)	口径 — 器高 — 底径 —	口縁片	淡褐色～暗褐色	砂粒を多く含む 長石・石英少量含む	昔	口縁部つまみあげ 外面 口縁部方向のナデ	



1 暗褐色土層

暗褐色土を主体としながらも比較的多量の黒色土が混ざる層
粘性 弱 しまり 強

2 暗褐色土層

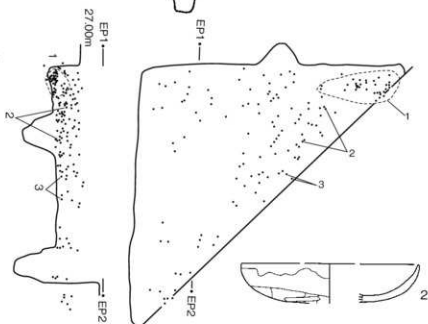
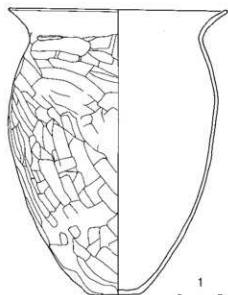
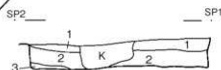
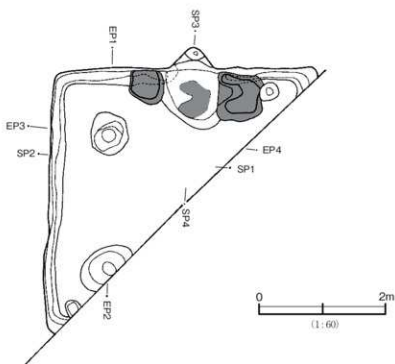
暗褐色土を主体とし、多量の黒色土が混ざる層
多量のローム粒が全体的に混ざる
粘性 弱 しまり 強

3 黒褐色土層

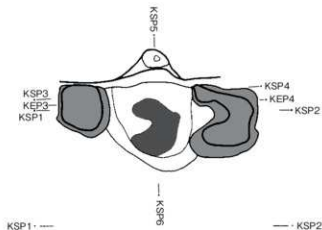
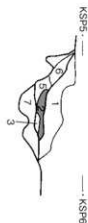
黒色土を主体とし、少量の暗褐色土が混ざる
粘性 弱 しまり 強

4 暗褐色土層

暗褐色土を主体とし、微量の黒色土が混ざる層
微量の焼土、粘土を含む。カマドがくずれたときの層と思われる
粘性 ややあり しまり 強



第7図 002D(1)



1 暗褐色土層

暗褐色土を主体に少量の黒色土がまざる。
少量のローム粒を含む、カマド外の土
粘性 なし しまり ややあり

2 白色粘土層

白色粘土を主体とし、少量の暗褐色土がまざる層。
天井部が崩落したセクションと考えられる
粘性 あり しまり よわい

3 赤褐色土層

赤色焼土を主体とした層に暗褐色土が粗く混ざる。
火床直上の焼土層と考えられる
粘性 よわい しまり よわい

4 灰褐色粘土層

白色粘土を主体としながらも多量の暗褐色土がまざる層。
袖あるいは袖のくずれた層と考えられる
粘性 よわい しまり 非常によわい

5 暗赤褐色土層

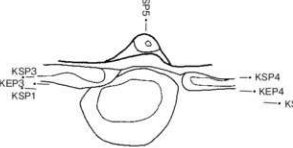
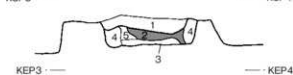
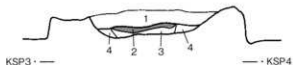
暗褐色土と赤色焼土が粗くまざる層、少量の炭化物も含む
粘性 よわい しまり よわい

6 暗赤褐色土層

暗褐色土と赤色焼土が粗くまざる層、少量のローム粒を含む
粘性 よわい しまり ややあり

7 暗褐色土層

焼土と暗褐色土が粗く混ざる層
多量のロームブロックを含む火床下のセクション
粘性 なし しまり なし



第8図 002D(2)

2. 001H (9図)

検出地区 B-4 Gに位置し、調査区中央に単独で検出された遺構である。北西方向5mに002I、南7mに002Hが位置する。

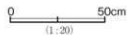
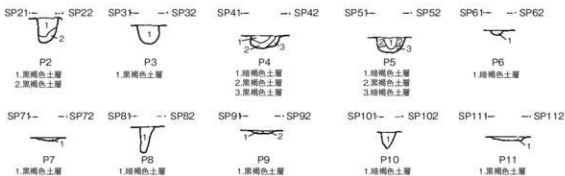
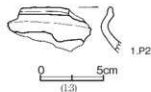
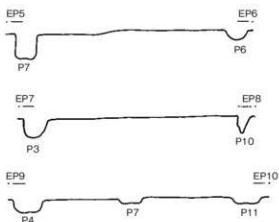
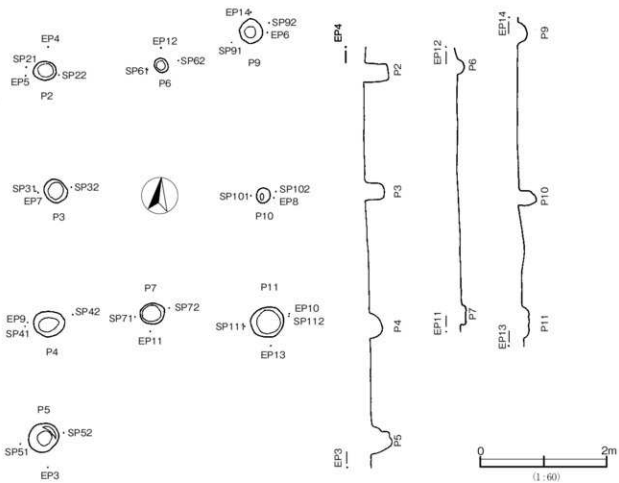
遺構 桁行2間(西側4.40m、東側4.90m)×梁間2間(北側3.70m、南側4.00m)測り、側柱構造の掘立柱建物とみられる。柱間距離 桁行1.90~2.60m 梁間1.50~1.80m。柱穴数9基。西側は桁行方向南に柱穴が1基伸びる。P5は廂もしくは出入り口と思われる施設か。

掘り方 いずれも平面は不正円形を呈し、P5は北西にテラスがあり、0.25~0.50mの範囲におさまる。どの柱穴にも、柱のあたりは認められなかった。柱穴深度は、ばらつきがあり、断面の形態も不揃いである。妻柱であるP6、P7の掘り込みは他と比べて浅い。

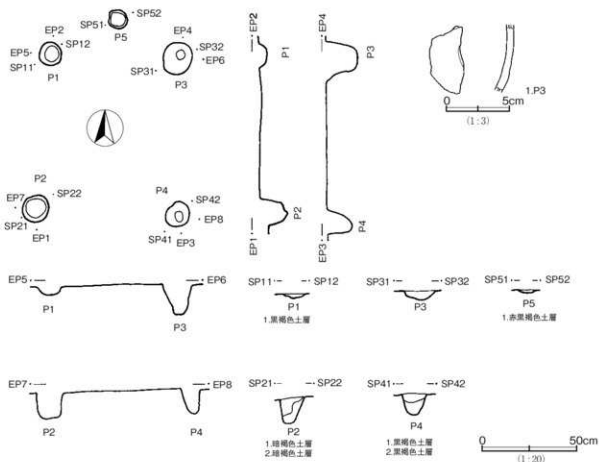
覆土 土層断面の観察から分層はできたが、いずれの柱穴も同様の土質である。

出土遺物 1は、土師器甕口縁部小片である。P2覆土中から出土。ナデによる整形で、胎土に長石・石英・赤色スコリアを含み、燈褐色の色調である。口唇部はつまみ上げられ外反する。常総型甕。他にP5覆土中から土師器小型甕胴部片の出土が見られたが、小片の為に図示しなかった。

所見 2Iと南北軸がほぼ一致する。奈良時代か。



第9圖 001H(1)



第10図 002H

3. 002H (10図)

検出地区 B-6 Gに位置し、調査区南部に単独で検出された遺構である。北7mに001H、東8mに002Dが位置する。

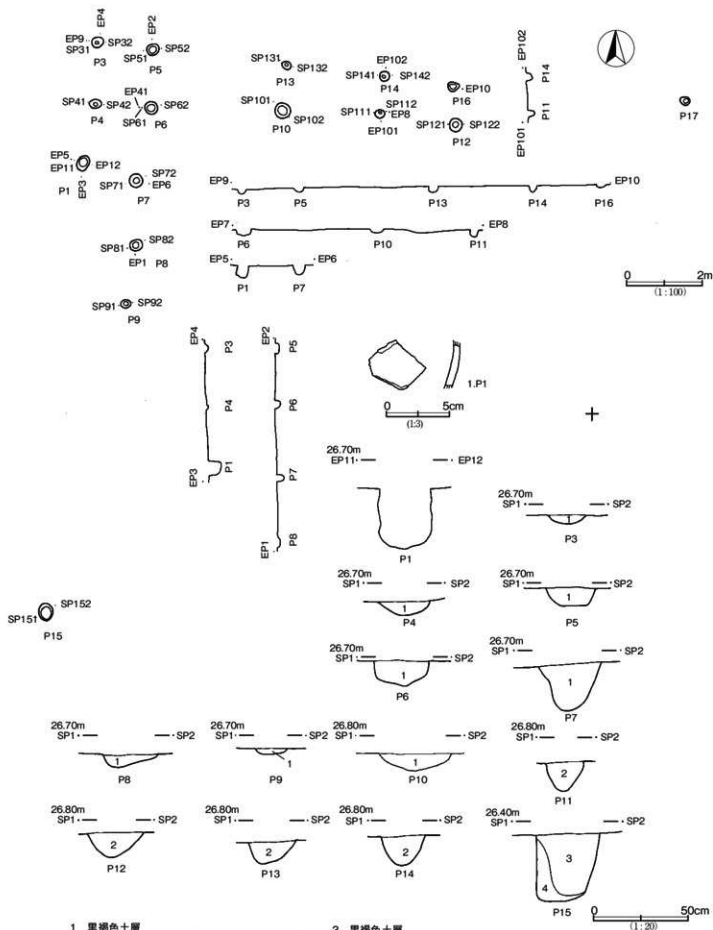
遺構 桁行1間(西側2.80m、東側2.90m)×梁間1間(北側2.40m、南側2.60m)を測り、側柱構造の掘立柱建物とみられる。柱間距離 桁行2.50n~2.60m 梁間2.1~2.3m。柱穴数5基。P5は独立棟持柱か？

掘り方 いずれも平面は不正円形を呈し、0.30~0.50mの範囲におさまる。いずれの柱穴にも、柱のあたりの痕跡は認められなかった。柱穴深度は、ばらつきがあり、断面の形態も不揃いである。P1、P5の掘り込みは他と比べて浅い。

覆土 土層断面の観察から分層はできたが、いずれの柱穴も同様の土質である。

出土遺物 1は、土師器甕胴部小片である。P3覆土中から出土。外面は縦位のヘラケズリ後ナデによる調整がなされ、内面はヨコナデの調整。胎土に長石を多く含み、赤色スコリアも認められる。全体の色調は燈褐色だが部分的に黒色である。

所見 南北の柱筋は磁北にのる。奈良時代か。



1 黒褐色土層

黒褐色土を主体とし、中量の黄褐色土がまだらに混ざる層
粘性 弱 しまり 強

2 暗褐色土層

暗褐色土を主体とし、少量の黄褐色土が混ざる層
粘性 弱 しまり 普

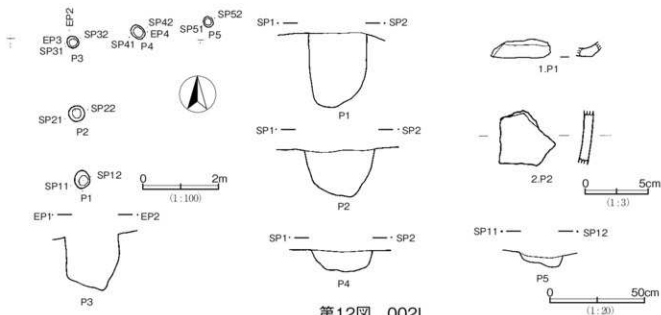
3 黒褐色土層

黒褐色土を主体とし、多量の黄褐色土がまだらに混ざる層
粘性 弱 しまり 強

4 黒褐色土層

黒褐色土を主体とし、少量の黄褐色土が混ざる層
粘性 弱 しまり 強

第11図 0011



第12図 002I

4. 001 I (11図)

検出地区 A-1・2・3・4 G、B-1・2・3 G、C-2・3 G、D-2 Gに位置し、調査区北西部で逆L字状に柱穴が並ぶ。平行する柱穴から1条の横列（垣根）とみる。遺構確認の段階で柱穴が削平された可能性や調査範囲の外まで横列が延びる可能性は考慮できる。

遺構 外側横列で東西方向14.00m、南北方向15.00mを測り、内側横列で東西方向10.00m、南北方向5.50mを測る。柱間距離 外側横列1.50～3.50m 内側横列1.50～3.50m。外側横列9基、内側横列7基の柱穴で構成される。外側横列、内側横列の間隔は狭いP10～P12で1.00m、広いP1～P7で1.50mを測る。

掘り方 いずれも平面は不正円形を呈し、0.20～0.50mの範囲におさまる。いずれの柱穴にも、柱のあたりは認められなかった。柱穴深度は、ばらつきがあり、断面の形態も不揃いだが、P1、P15に見られる直径0.30mが柱穴の基準であったと考えられる。

覆土 土層断面の観察から分層はできたが、いずれの柱穴も同様の土質であった。

出土遺物 1は、土師器甕胴部小片である。P1覆土中から出土。ナデによる整形で、胎土に長石・石英・雲母を多量に含み、燈褐色の色調である。常総型甕の一部か。

所見 横列として北西の屈曲部を検出した。東・南に遺構が延びることは判明したが規模は不明。遺構の配置から検出された他遺構を区画する意図は読み取れる。奈良時代か。

5. 002 I (12図)

検出地区 A-3・4 Gに位置し、調査区西部に逆L字状に柱穴が並ぶ。1条の横列（垣根）とみる。遺構確認の段階で柱穴が削平された可能性は考慮できる。002P近接し、東1.0mに001Hが位置する。

遺構 東西列で3.90m、南北列4.00mを測る。柱間距離 1.70～1.90m。5基の柱穴で構成される。

掘り方 いずれも平面は不正円形を呈し、0.30～0.40mの範囲におさまる。いずれの柱穴にも、柱のあたりの痕跡は認められなかった。柱穴深度は、ばらつきがあり、断面の形態も不揃いだが、P1、P3に見られる直径0.30mが柱穴の基準であったと考えられる。

覆土 土層断面の観察から、いずれの柱穴も同様の土質であった。

出土遺物 1は、須恵器坏体～底部小片である。P1覆土中から出土。ロクロによる整形。外面は横位のヘラケズリ、内面はナデによる調整が認められる。胎土に長石を多く含む。全体の色調は灰色である。P1からは他に土師器甕胴部片が2点出土したが、小片の為に図示しなかった。2は、土師器甕胴部小片である。P2から出土。ナデによる整形で、胎土に長石・石英・雲母を多量に含む。外面は燈褐色、内面は淡黒褐色の色調である。

所見 横列として北西の屈曲部を検出した。001Hと南北軸がほぼ一致する。奈良時代か。

6. 001M (13回)

検出地区 A-1G、B-1・2G、C-1・2G、D-2G、E-2Gにまたがり、東西にほぼ直線で調査区域外までに伸びる。001Iと切り合うが前後関係は不明である。西側で南1.50mに12P、中央部から南0.50mに7Pが位置する。

遺構 検出部分は長さ43.00m、溝上部の幅は1.20～1.80mを測る。底面の幅は0.40～0.70mの範囲に取りまり傾斜、凹凸は特に認められなかった。

掘り方 断面は皿状またはレンズ状を呈し、壁は緩く立ち上がる。深さは0.50m前後を測る。

覆土 土層断面の観察から、3層のレンズ状堆積が確認できる。硬化面は認められず、1層底面で焼土の塊を検出した。焼土は散在するが、あえて言うなら中央から東側部分でひろがる。自然堆積だが、ある程度溝が埋まった段階で「燃や」していた痕跡が判明した。

出土遺物 遺物の分布状況は、そのまよりから焼土との関連が窺える。溝底面からの遺物の出土は少ない。溝出土の遺物は、取り上げ時の註記番号を図版の遺物番号としてそのまま採用する。

6. 須恵器長頸壺。肩部片か。ロクロ整形。外面は緑灰色で自然軸が全体にかり、内面は灰白色の色調を呈する。胎土は黒色砂粒を少量含む。焼成は非常に堅緻。同一個体が一点出土するも接合せず。東海産。

84. 須恵器蓋つまみ部。蓋からつまみだけが外れた状態で出土。胎土に雲母が含まれる。外縁の稜より中央部分は低い。新治産。

86・87. 土師器坏体部小片。ヨコナデ整形。丸底状坏体部に相当する。胎土に雲母が含まれる。体部中央で若干の稜が認められる。

14. 須恵器甕。口縁部小片。ナデ整形で外面は縦位の叩き目。口唇部をわずかにつまみ上げる。内外面とも灰色の色調を呈する。胎土は長石を含み、焼成は普通である。土器の内面は淡橙褐色でありサンドウィッチ状の胎土焼成が観察できる。千葉産。

19. 須恵器甕。口縁部小片。ナデ整形。口唇部は直立きみに立ち上がる。内外面とも灰色の色調を呈する。焼成は普通。千葉産。

21. 須恵器大甕。口縁部小片。ナデ整形。口縁部が大きく外反する。輪積み痕跡が外面に認められる。胎土は長石、石英を多量に含む。色調は灰色で、焼成は普通である。同一個体が一点出土するも接合せず。新治産。

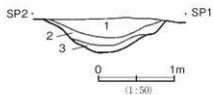
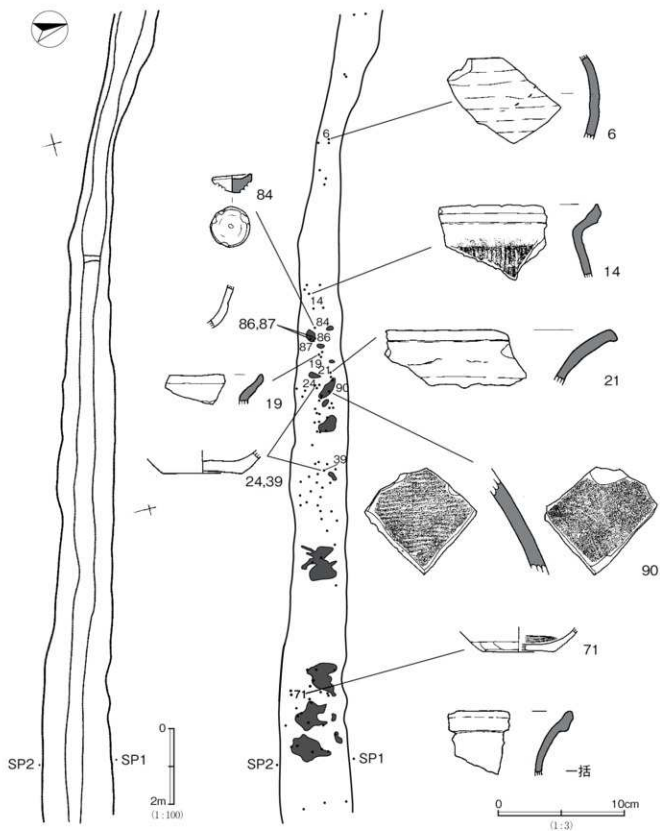
24・39. 土師器坏。底部片。ロクロ整形。外面体部下端は横位のヘラケズリ、底部は回転糸切り後多方向のヘラケズリ。胎土は長石、石英、雲母を含む。内外面とも橙褐色の色調を呈する。焼成は普通。

90. 須恵器大甕。肩部小片か。外面は横位の平行叩き目、内面は丸い当て具痕が僅かに分かる。胎土は精選された粘土を使用し黒色粒子を若干含む。色調は白灰色で、焼成は堅緻である。東海産。

71. 土師器坏。底部片1/4残存。ロクロ整形。外面体部下端は横位のヘラケズリ、底部は回転ヘラケズリ。内面は多方向のヘラミガキが施される。胎土は長石を含む。色調は淡明褐色で焼成は普通である。内面は黒色処理がされる。

一括。須恵器甕。口縁部小片。ナデ整形。内外面ともヨコナデ。胎土は石英を少し含む。色調は黒色を呈し、焼成は普通である。千葉産。

所見 土師器丸底坏、須恵器蓋・長頸壺は古い様相だが、体部下端にヘラケズリを施す土師器坏は新しい様相であり、覆土に混在している。損壊したものを投げ込むというよりは、細かく砕いて遺棄していたかのような状況が明らかとなる。奈良時代か。



- 1.暗赤褐色土層 暗褐色土を主体に多量の焼土が粗く混ざる。少量の黒色土も斑状に混ざる。粘性なし しまり強い
- 2.暗褐色土層 暗褐色土を主体に少量の黒色土、微量のローム、ごく微量の焼土が混ざる。粘性なし しまり強い。
- 3.暗褐色土層 暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる。粘性なし しまり強い

第13図 001M

7. 土坑 (14回)

調査時の、遺構の組み合わせで判断付かないなどの状況であったので、そのままの番号を踏襲した。

04P

位置 B-2 G、南東に006 P。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整円形、底面・円形、壁はほぼ垂直で、底面は平坦。**規模** 0.32×0.26×深さ0.15m。**覆土** 暗褐色土を主体とし2層に分かれる。**遺物** なし。**所見** 人為堆積か。覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

05P

位置 B-3 G、北東に006 P、南東に014 P。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整円形、底面・不整円形、壁はほぼ垂直で、底面は平坦。**規模** 0.27×0.25×深さ0.20m。**覆土** 暗褐色土を主体とし2層に分かれる。**遺物** なし。**所見** 人為堆積か。覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

06P

位置 B-2・3 G、南西に005 P。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整円形、底面・円形、壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦。**規模** 0.36×0.35×深さ0.06m。**覆土** 暗褐色土を主体とする自然堆積。**遺物** なし。**所見** 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

07P

位置 B-3 G、北に001M、南西に011 P。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整方形、底面・不整方形、壁はほぼ垂直で、底面に若干の凹凸あり。**規模** 1.35×1.30×深さ0.25m。**覆土** 黒褐色土を主体とする自然堆積。**遺物** 覆土中から3点の遺物が出土する。1. 土師器甕。胴部片。外面、横位の叩き目、内面、ナデ。胎土に長石・赤色スコリアを含む。色調は橙褐色を呈する。焼成は普通。2・3は土師器甕の胴部片。2cm大の大きさと同一個体だが接合せず。小片の為に図示しない。**所見** 001Mと非常に近く、覆土も似ているため、相互の関連が想定できる。

08P

位置 C-2 G、北に001I、南東に011 P。**重複関係** 単独。**形態** 上部・円形、底面・円形、壁はほぼ垂直で、底面は中央が若干窪む。**規模** 0.64×0.64×深さ0.12m。**覆土** 暗褐色土を主体とする自然堆積。**遺物** なし。**所見** 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

09P

位置 C-3 G、南西に001H。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整円形、底面・不整円形、壁はほぼ垂直で、東側がひらく。底面はほぼ平坦。**規模** 0.33×0.30×深さ0.20m。**覆土** 暗褐色土を主体とし2層に分かれる自然堆積。**遺物** なし。**所見** 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

10P

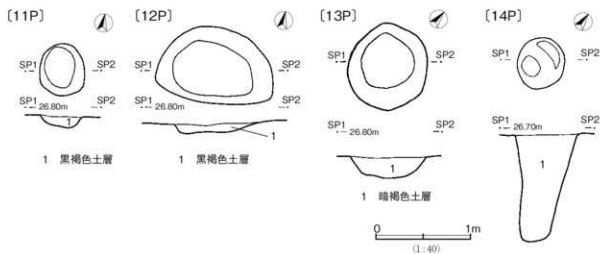
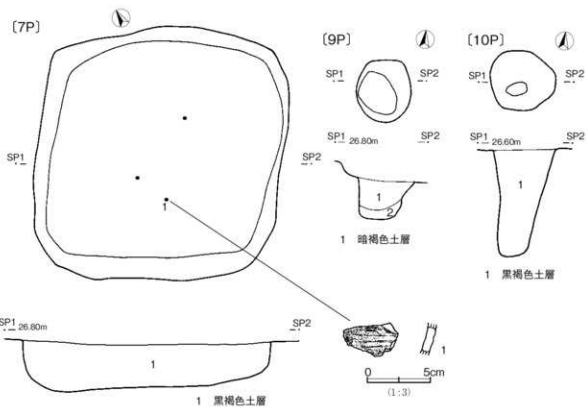
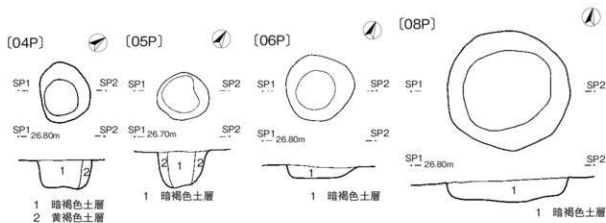
位置 C-4 G、西に001H。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整円形、底面・楕円形、壁は角度をもって立ち上がり、底面は半円状。**規模** 0.34×0.32×深さ0.54m。**覆土** 黒褐色土を主体とする自然堆積。**遺物** なし。**所見** 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

11P

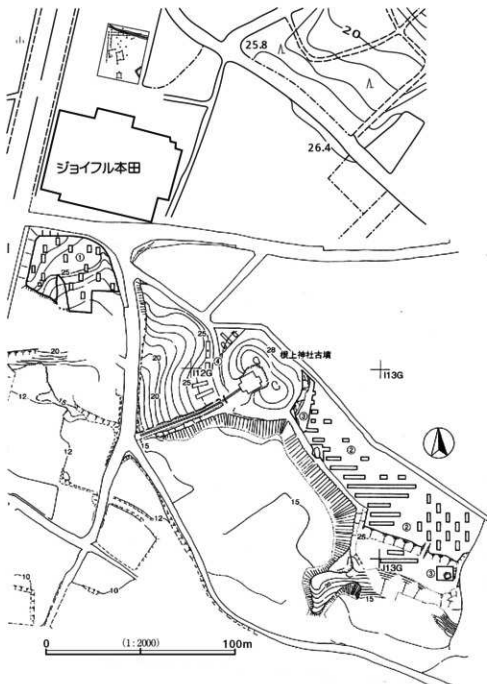
位置 C-2 G、北東に007 P。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整円形、底面・不整円形、壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦。**規模** 0.27×0.25×深さ0.05m。**覆土** 黒褐色土を主体とする自然堆積。**遺物** なし。**所見** 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

12P

位置 A-1 G、北に001M、南に001H。**重複関係** 単独。**形態** 上部・不整楕円形、底面・不整楕円



第14図 04P~14P



第15図 白筋遺跡各地点調査範囲

2007年「浅間内遺跡 白筋遺跡 沖塚遺跡」から加筆修正の上作成

形、壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦。規模 0.62×0.40×深さ0.05m。覆土 黒褐色土を主体とする自然堆積。遺物 なし。所見 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

13 P

位置 B-1 G、南に001M。重複関係 単独。形態 上部・不整形形、底面・不整形形、壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平坦、中央は若干くぼむ。規模 0.45×0.42×深さ0.10m。覆土 暗褐色土を主体とする自然堆積。遺物 なし。所見 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

14 P

位置 B-3 G、北西に005 P、南に001H。重複関係 単独。形態 上部・不整形形、底面・不整形形、壁はほぼ垂直で北側にテラスの中段がある。規模 0.27×0.25×深さ0.40m。覆土 暗褐色土を主体とする自然堆積。遺物 なし。所見 覆土の土質、周囲の状況から奈良時代とする。

第3章 成果と課題

806㎡という調査面積であったが、各時代の遺構が検出された。以下、時代を追い簡単にまとめる。

第1節 縄文時代

短楕門で坑底は平坦な陥し穴1基を検出した。白筋遺跡は、舌状台地の基部に位置し、周りと比べると標高は若干高い。本遺跡での陥し穴の検出は初めてで、隣接する村上込の内遺跡では検出されず、浅間内遺跡では25基が存在し、同様の形状のものは2基確認できる。今回、遺構に伴わないが、堀之内I式の精製土器片が採集できた。辺田前・沖塚前低地を中心として見た場合、堀之内期の人々の活動の痕跡は希薄であるが、白筋遺跡で知見が得られた点は留意できよう。

第2節 奈良時代

調査範囲は狭く、遺物が少ない2点を前提に記述を進める。検出した2Dでは、武蔵型甕、口径の大きい丸底環が出土し、下総国府2b期、油作遺跡第II期の器種構成の範疇で捉えられ、8世紀第2四半期に位置付けられる。当該期の特徴として、東海産（湖西産）の須恵器、常陸産須恵器の「かえり蓋」・底部より高台の高さが突出する高台付坏、赤彩土師器、非ロクロ整形で口径が15cm内外の土師器環などが挙げられる。市域では、本郷台遺跡において当該期の土師器丸底環が出土しており、近接する浅間内遺跡、村上込の内遺跡でも確認されている。つぎに、遺物の多かった1Mでは8世紀代と9世紀代の遺物が、焼土中にまとまって共存する。1Mは、9世紀の段階ですでに存在し、埋没過程で「燃や」す行為をした後、意識的に分割した土器を遺棄したのだろう。溝を掘削したのは、空間を限定する目的が考えられ、2Dと同時期に併存、もしくは比較的短い時間幅の中で存在していた可能性が考慮できる。

欄列（垣根）2条と掘立柱建物2棟の南北軸は、概ね磁北と一致する方向であった。2Hは、市域で独立棟持柱を持つ可能性のある掘立柱建物の初例である。独立棟持柱は、妻側より外側にはみ出して建てられた柱であり、弥生・古墳時代の「神殿」に採用されている（1）が、遺構単独で奈良時代の「神社」とみなすには検討を要する。南北軸を中心として遺構の構成を考えた場合、①1I-2H、②2I-1Hの組み合わせを抽出でき、近距離でありながら重複することがない。2Hの独立棟持柱の覆土には若干焼土が認められ、1Mとの関連が指摘できる。所属時期の判定は困難だが住居、溝がそれだけで存在していた可能性は低く、また①、②の組み合わせが、2Dと時間が大きく離れ、それだけで設営されたとは考えづらい。空間の圍繞は、計画的な占地に基づいた結果であり、調査範囲内にもその意識は及んでいる。「欄-掘立」の所属時期は、2Dと同時期か、一世代を隔てず設営された8世紀前葉～中葉と想定でき、「欄-掘立」は2通りの組み合わせから相前後する建て替えが推測できる。1H、2Hの機能を考える場合には、山田水呑遺跡での掘立柱建物址の4分類が参考になり、作業所・納屋に該当する（2）。白筋遺跡別地点の報文の中で中野氏は「…古墳周囲を『神聖な空間』として…『禁忌』を生じさせた可能性」に触れており、b地点の結果に示唆を与える（3）。遺構により空間を区画する遺跡として、千葉市荻生遺跡は8世紀代の神社遺構、千葉市芳賀輪遺跡では8世紀末～9世紀前半の豪族居館などの類例が確認できる（4）。「神聖な空間」であることを加味し、遺跡の性格を考えるならば、単に「納屋」ではなく「社」を構成する一部として存在していた可能性は言及できよう。（伊藤 弘一）

- （1） 広瀬和雄1998年「クラから神殿へ」『先史日本の住居とその周辺』同成社
- （2） 石田広美1977年「掘立柱建物址の分析」『山田水呑遺跡』日本道路公団・山田遺跡調査会
- （3） 中野修秀2007年「第5章（2）白筋遺跡」『浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』八千代市遺跡調査会
- （4） 田中尚明2000年「考古学からみた古代の神社」『紀要』第25号 埼玉県立博物館

柱間寸法による掘立柱遺構の分類

白筋遺跡b地点の調査範囲では1Iと2Iの柱列、1Hと2Hの掘立柱建物とみられる遺構が検出されている。

1Iは平行する柱列が東西方向と南北方向に2本ずつ並び、調査区域北西部でほぼ直行している。柱列はほぼ平行しており柱の間隔もよく対応していることから築地壁など敷地境界を示す構造物が想定されるが、隅角部四本の柱列が柱間1.5mとなるほかは柱の間隔が一定しない。柱列の方向はやや東に傾き、傾きは柱列によってわずかに異なる。

2Hは東西方向に2.1m、南北方向に2.4mの柱間でそれぞれ一間の規模である。北側の柱間中央に棟持柱と考えられる柱穴を伴うが、南側には同様の柱穴は認められないことから建物北側からの出入口の可能性も指摘できる。建物の中心軸はほぼ正確に方位に従っている。

2Iおよび1Hを含む柱列は、東西方向に1.9m、南北方向に1.9mの柱間をとる部分と、東西方向が1.75mの柱間となる部分がみられる。1Hは東西方向に二間、南北方向に三間の棟持柱を伴う建物とみられるが、東西方向への延長とみられる柱の存在や2Iとの関係など建物の形態は不明である。柱列南北方向の軸はN-5°-Wとなる。

2Hは一尺=0.303mとすると東西方向が一間約七尺、南北方向が一間約八尺となるほか1Iの北西隅角部は一間約五尺となり一尺単位での計画が推測できることから、白筋遺跡b地点の掘立柱列の柱間寸法は一定の規格に基づいて計画されているとみてよさそうである。2Iおよび1Hの柱間寸法も一定している部分がみられることから計画性を認めることはできるが、一尺=0.303mとすると一間約六尺三寸または一間約五尺八寸となる。1Iと2Hおよび2Iと1Hでは柱列の方向も異なっており、柱間寸法の決定の際には異なる規格が用いられていたと考えられる。

一寸は約3cmであり計測には高い精度が必要となることが推測できるため、柱間寸法は一尺単位で計画されていたと考えるほうが容易である。古代の建築における一間の寸法の把握には柱間から算出する方法がとられる場合が知られており(1)、一尺=0.303mだけでなく複数の尺度(2)が存在したことや、同時期に異なる尺度が用いられていたことが知られている(3)。周辺の遺跡にみられる掘立柱建物にも規格を伴うと考えられる配置の柱列の事例が知られているが柱間寸法はそれぞれ異なっており、複数の規格が用いられていたと考えてよさそうである。

したがって、白筋遺跡b地点に見られる掘立柱建物は、柱間寸法から1Iと2Hおよび2Iと1Hの二系統として分類することができる。(高屋 麻里子)

参考文献：

- 宮澤久史・朝比奈竹男 八千代市遺跡調査会編 『栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ -第2分冊-』、2003.7
- 千葉県文化財センター編 『千葉県文化財センター調査報告第188集 八千代市白幡前遺跡 -壹田地区埋蔵文化財調査報告書V-本文編』 住宅都市整備公団首都圏都市開発本部、1991.3
- 千葉県文化財センター編 『八千代市井戸向遺跡 -壹田地区埋蔵文化財調査報告書IV』 住宅都市整備公団首都圏開発本部 千葉県文化財センター、1987.3
- 市川市教育委員会 『下総国分寺 平成元～5年度発掘調査報告書』 市川市川考古博物館、1994.3

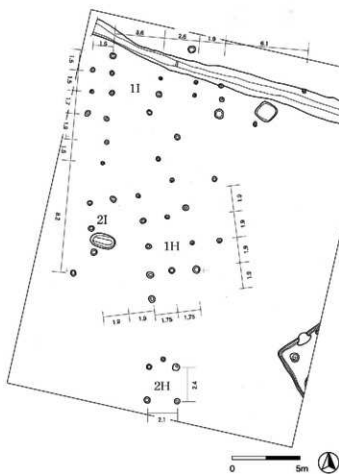
(1) 伊藤延男ほか編『文化財講座 日本の建築 1 古代』 第一法規出版株式会社、1977.3

(2) 『日本歴史大事典』 小学館、2000 高麗尺、唐尺、曲尺、縮尺などが知られている。

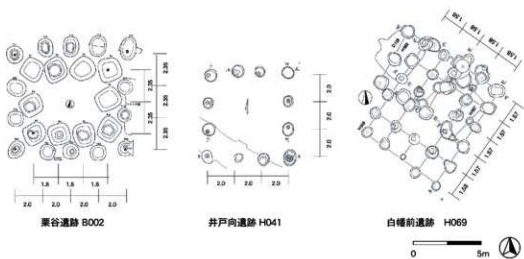
(3) 市川市教育委員会『よみがえる天平の礎 史跡上総国分寺跡 中門・回廊復元事業報告書』、1998.3



第16図 白筋隣接遺跡遺構配置図



白筋遺跡b地点掘立柱の柱間寸法



第17図 白筋遺跡b地点の掘立柱と周辺遺跡の事例にみられる柱間寸法



完掘状況（北から）



プラン検出状況



2D 完掘状況



調査風景



調査風景



2D 完掘状況



2D カマド完掘状況



2D 遺物出土状況



2D 遺物出土状況



2D 1



2D 2



2D 2



1H 完掘状況



2H 完掘状況



1I 完掘状況



2I 完掘状況



1H 2P



2H 3P



1I 1P



2I 1P



2I 2P



1M 全景写真



1M 14



1M 84



1M 21



1M 90



1M 6



1M 24・39



1M 一括



1M 71



4P 完掘状況



5P 完掘状況



6P 完掘状況



7P 遺物出土状況



7P 出土遺物



7P 完掘状況



8P 完掘状況



9P 完掘状況



10P 完掘状況



11P 完掘状況



12P 完掘状況



13P 完掘状況

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし しろうじいせきびーちてん はっくつちようさほうこくしょ							
書名	千葉県八千代市 白筋遺跡b地点 発掘調査報告書							
編集者名	伊藤 弘一 高屋 麻里子 宮澤 久史							
編集機関	八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047 (481) 0304							
発行年月日	西暦 2008年(平成20年) 3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白筋遺跡b地点	ちうせんよふたつたがひのうち 八千代市村上字殿内1587-3外	12221	208	35度 43分 25秒	140度 7分 17秒	20070720 ～ 20070813	806㎡	立体駐車場 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺物			特記事項	
白筋遺跡b地点	包蔵地	縄文時代		陥し穴	1基	縄文土器		
	集落跡	奈良・平安時代		竪穴住居跡	1軒	奈良・平安時代 土師器		
				掘立柱建物跡	2棟			
				横列	2条			
				溝	1条			
				土坑	11基			
要 約	<p>白筋遺跡b地点本調査の発掘調査報告書で、民間開発事業関連調査として、八千代市が直営調査として実施した。</p> <p>検出した遺構は縄文時代・陥し穴1基、奈良時代・竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、横列2条、溝1条、土坑11基。</p> <p>表採した遺物は、縄文後期、堀之内期の精製土器1点。遺物は、竪穴住居跡、溝跡を中心として奈良・平安時代の土師器・須恵器の壺・坏・長頸壺・甕などの小片が出土した。横列・掘立柱建物跡からも土師器・須恵器小片が出土。</p> <p>住居跡からは、武蔵型壺、土師器丸底坏が出土し、8世紀第2四半期の土器様相が捉えられた。</p> <p>市域で初めて独立棟持柱を持つ可能性のある掘立柱建物跡を検出。住居跡・掘立柱建物跡・横列・溝は、一体の空間構成を持ち、計画的な遺構の占地が認められた。</p>							

千葉県八千代市
白筋遺跡b地点発掘調査報告書
2008（平成20年）

印刷日 2008年3月28日
発行日 2008年3月30日
編集・発行 八千代市教育委員会
〒276-0045 八千代市大和田138-2
TEL 047-481-0304

印刷 株式会社 マネジメント オオナカ